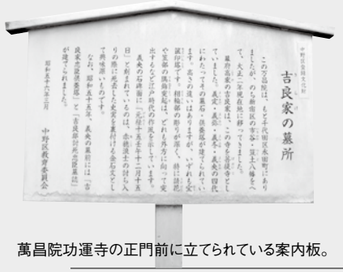
墓が語る 一大事 十九

萬昌院功運寺 吉良上野介義央

昨年12月号は「赤穂義士」の墓・泉岳寺を取り上げた。内容を大石内蔵助や赤穂浪士の視点から記した。

今年は吉良上野介の立場からの話である。視点を変えてみると、芝居などで扱われる吉良とはまた別な上野介が立ち現れてくる。



萬昌院功運寺の正門前に立てられている案内板。

上野介は悪人ではなく、なかなかの好人物

時は元禄14年（1701）3月14日、赤穂藩主浅野内匠頭長矩が江戸城松之廊下で吉良上野介義央（よしひさ／よしなか）を小刀で背中から斬りつけ、内匠頭は切腹、御家は断絶。これに腹を立てた赤穂浪士が吉良邸に討ち入った日――、それが、ご存じ12月14日。つまり、敵として殺された吉良上野介の命日にあたるわけである。

現代人はさほどでもないが、明治から大正にかけての日本人は、吉良上野介という人物をとにかく「冷酷非情な極悪人」と思っていたようだ。

だが、実際には吉良に関する資料をひっくり返してみても〝悪人〟といったイメージは全く出てこない。それどころか、なかなかの好人物なのである。

吉良氏は元々、清和源氏の流れを汲み、承久の乱に戦功のあった足利義氏の子孫だった。上野介は寛文8年（1668）、父・義冬の死去により28歳で家督を相続。その後は地元である三河のために尽力を尽くし、毎年のように襲う洪水から領地を守るため、貞享3年（1686）に「黄金堤」完成。元禄元年（1688）には、約千石の新田を作り、富子夫人の名を取って「富好新田」と名付けるなど、新田開発にも積極的に取り組んだ。さらに、三河に立ち寄る際も陣屋でふんぞり返ったりせずに寺院に宿泊。赤い駄馬で巡回し、その言い伝えが郷土玩具の「吉良の赤馬」として残っているほどだ。

上野介が担っていた朝廷関係の儀式を司る高家の、それも肝煎という職もそう簡単に就けるというものではなかった。高家とは幕府から京都への使者や伊勢・日光参拝の名代のほか、江戸に下向する勅使・院使などの接待にあたり、その年の接待役に任命された大名に礼儀作法を指導。普段は交代で江戸城雁の間に詰め、老中の登城及び退出を送迎したというから、早い話が重役室付けの秘書のようなものだった。

ちなみに、ほかの高家が千五百石のところ、上野介は四千二百石だったというから、破格な待遇といえ、重宝されていたことがよくわかる。

江戸庶民の「勧善懲悪」好みで上野介は敵役に

では、なぜ内匠頭は上野介に斬りかかったのだろうか。

その理由として挙げられるひとつが、内匠頭が上野介への賄賂を惜しんだことにより、以後の指導を受けるなどの嫌がらせを受けた、というもの。

だが、この時代、指南を仰ぐ際に進物を送るのは常識。そんなことは日常茶飯事だった。しかも「松之廊下事件」の直接の引き金になったとされる式典当日、本当は大紋風折烏帽子という礼装のところ内匠頭は長裃と教えられ恥をかいた、という説にもかなり無理がある。というのも、内匠頭は天和3年（1683）にも勅使饗応役を務めており、つまり今回が2度目で、すでに勝手はわかっていたはずだからである。

そう考えると、そのどれもがすべてが後付けされた筋立て、となるわけだが……

では、なぜ上野介は極悪人にされてしまったのか。

理由は簡単。単純に芝居として浅野内匠頭及び赤穂浪士を「善」、吉良上野介を「悪」という図式にしたほうが分かりやすく、それを江戸庶民が好んだからに他ならない。

元禄15年12月14日（1703年1月30日）の「赤穂浪士討ち入り」を題材にした劇が最初に上演されたのは事件の翌年正月。「曽我兄弟の仇討ち」の趣向で赤穂浪士討ち入りを示唆した。3年後の宝永3年（1706）には近松門左衛門が『碁盤太平記』として人形浄瑠璃化し、その総まとめとして寛延元年（1748）に人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』が上演された。

で、芝居を盛り上げるためだろう、その間に上野介のイメージはどんどん「陰険」で「狡猾」さらには「非情」で「好色」になってしまったのである。

武士道衰えた時代の格好の題材 赤穂浪士討ち入り

そんな思いを胸に、上野介の墓がある中野区の萬昌院功運寺を訪ねてみた。吉良家の墓所は中野区登録文化財に指定され、昭和55年（1980）、義央の墓前に「吉良家忠臣供養塔」と「吉良邸討死忠臣墓誌」が建てられた。

〝元禄15年12月15日〟と刻まれた墓石の傍らにある墓誌によれば、赤穂浪士の討ち入りによって命を失った吉良勢は全部で39人。家老の小林平八郎以下、用人、祐筆、中小姓、近習、執事、取次、足軽、足軽小頭、徒士、仲間、厩別当、それに料理番や15歳の茶坊主まで、含まれていたという。

いやはや、まさに〝暗闇を乗じた大殺戮〟である。

だが、上野介にとっては時代が悪過ぎたのだ。この浪士討入事件は泰平の世に衰えがちであった武士道の鑑として世の人々を歓喜させ、事件直後から「忠義の士だ！　義士だ！」と騒ぎ立てられた。

結果、これが芝居の格好の題材となり、やがて仇役として登場する吉良上野介義央は強欲非道で冷酷、悪人の極みとして喧伝された。

つまり、高家肝煎として仕事を全うしたに過ぎない上野介は、誰も味方してくれない孤高の士として、後世まで悪役を演じ続ける運命を背負わされたというわけだ。

そう考えると、吉良上野介にとって人生最大の一大事は、浅野内匠頭の指南役になったことだったのかもしれない。

左／萬昌院功運禅寺と彫られた正門前の石柱。

右／右端が吉良上野介の墓。

身に覚えがないことじゃ 内匠頭殿は 血迷われたのであろう 儂が首を討たれる謂れはない！

きらこうずけのすけ●寛永18年9月2日（1641年10月5日）～元禄15年12月15日（1703年1月31日）。高家旗本吉良義冬（4200石）と酒井忠勝の姪との嫡男として江戸鍛冶橋吉良邸で生まれる。今川家の系譜の名門で高家肝煎。浅野事件で内匠頭の敵とされ、赤穂浪人に討たれる。正式には吉良義央だが、上野介と呼ばれることが多い。墓は萬昌院功運寺（東京都中野区）と吉良家の菩提寺・片岡山華蔵寺（愛知県西尾市）に建立された。

右／萬昌院功運寺の本堂。
左／萬昌院功運寺の正門。

文＝椛木倫太郎（かばきりんたろう）　写真＝韮谷真紀